

銀魂～クロスオーバー乱舞～ 混ぜりゃ面白い時だってある！！

イビルジョーカー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある日、万事屋を営む坂田銀時は、おそ松家の三男に長男・おそ松の

様子がおかしいと相談するのだが……。

※この小説は作者が銀魂キャラ、ついでおそ松さんの六子たちがプリキュアに憑依する形でクロスしたら面白いんじゃないかな？ 的な幼稚

な発想から生まれた産物です。ついでおそ松がジャンプ本誌から消

え去ったショックもあります。

更についでに言えば、他の作品クロスもしてみたかったからやっつてもうた！ みたいな部分もあります。こんなにしちやつてカオス極まりないとは思いますが、面白おかしく、時にSF人情劇な銀魂物語を見て頂ければ幸いです。

## 目次

第1訓 『君の名は』を見て、最高だと思った日を僕は忘れない

1

バカが集まると大抵碌なことがない。

10

第1訓『君の名は』を見て、最高だと思つた日を僕は忘れない

侍の国、僕らの国がそう呼ばれていたのは……。

「おい、もういいだろこの下り」

「そうね。いちいちこんな説明しなくていいアル。読者もきつと呆れてる筈ヨ」

「いや、そんな身も蓋もない話しないで下さいよ。一応知らない人もいると思いますし……」

…」

「おいおい、ぱつつあんよお。これ二次創作の有名サイトだろ？」

このサイトをご利用している方々はもう銀魂なんて知ってるからね。全然考慮なんて必要ねーよ。今年で実写化第2弾までされてる俺達を知らない奴なんていないって」

「そうネ。それなのに知らない奴は見るなって話アル」

「なに喧嘩売るような事言ってるの?! 苦情来ますよ!!」

「苦情だあ? なめんじゃねーよ。俺達はこれまで、幾多の敵を相手にして来たんだよ。東○とか、子供の教育に悪いだ何だと騒ぐ○○○  
○会とか!!」

「ちよつとおおおお!!! それダメな奴ですから! 敵に回しちやいけない人たちですからね!!」

「でも、東○に関してはもう敵に回したも同然アル。色々仕出かしたし」

「いや、それはまあ諸々あったけども! でもその件はとつくに解決したし……」

「つまりもう怖いものは無しだな。じゃー、思い切って○○とか、○○  
○や、○○○○もやってみるか」

「伏字だらけじゃねえか!! 何をやらかす気ですかアンタは!!」

「まあ、こんな所で恒例のグダグダ会話続けるのもアレだから、そろそろ本編行くか！」

「銀魂くクロスオーバー乱舞！　混ぜりや面白い時もある！　開幕！！」

※

万事屋銀ちゃん。

簡単に言えば何でも屋のそれだが、その店主である坂田銀時は木製の事務用机の椅子に腰を落とし、そして死んだ魚のような目が特徴的な締まりのない顔に心底うんざりとした表情を浮かべている。

「何としてくれよ銀さん！！　マジでヤバいんだって！！」

理由は万事屋からそう遠くない松野家の六つ子の一人、三男のチョロ松が原因だった。きっかけは10時頃。いつものように客足はろくになく金になるような話も入ってこない暇過ぎる状況の中でジャンプを見ていた時、チョロ松はやって来た。

しかし来て早々、顔は切迫詰まるとばかりに慌てた様子で落ち着く気はないに等しかった。

とりあえず。このままではまともに話を聞けなかったのでチョロ松の顔面めがけ蹴りをぶち込み、やや強引ながらも鎮静させた銀時は改めて事情を聞いたのだが……。

「考えてもみてよ。あのクソ長男だよ？　エロのエロ、もうエロの帝王にでもなった方がいい位のエロさと全つつ然働く気もないニート。そして平然と他人を裏切ったり、人の事なんか御構い無しの無神経さ！！　まるで、クズを寄集めて出来たようなクズの化身！！　そんなおそ松兄さんが……………」

ダンッ！

「普通に何気なく荷物が多さに困ってるお婆さんの荷物を持ったり、

迷子の子供を見つけて交番まで送り届けたり、時には親の人探ししたりとかして。それで家事とか掃除をしたり……色々おかしいんだよ!!」机をこれでもかと思いつきり叩き、自分の兄にして長男であるおそ松に対して散々な感想を述べ立てる。だが、後半に関しては別にどうと言う事ない普通過ぎる親切な行動のためか、銀時の顔はやはり呆れ顔を崩さない。

「おかしいのはお前だろ。つーか、前半の部分に関しては同類だろーがシコ松」

「シコ松言うなアアツ!! ともかくおかしいんだよ! おそ松兄さんがそんな事するような人間じゃないって、知ってるだろ?!」

「オメーもな」

人間としては非常に当たり前で良い事なのだが、それを自主的に実行することがないのが松野家の六つ子たちだ。

クズ、エロ、ニートという三拍子を完璧に持ち合わせた彼等は人として落ちまくった存在と言える。

そんな彼等の長男ことおそ松が何気なくやる、それも自主的にというのがチョロ松や他の六つ子達にとっても驚愕の一言に尽きるのである。

「アレだろ? ようやっど自分自身のダメさに気づいて目覚めたって感じだろ? 考えてもみろよ。お前らは誰がどう見てもニート、いやニート以下の穀潰しの寄生虫みたいなもんだろ? そりゃあ『そうだ。このままじゃいけない!』ってなるよ。うん。だから、おそ松も生まれ変わったんだよ。よかったじゃねえか」

「よくあるかアアツ!! アンタ僕たちの事をそんな風に見てたの? 思ってたの? 傷つくはッ!!!」

「ともかくこれでよかったんだよ。真人間になるってことは、良き社会人になるも同義なんだから。お前らも見習って早くニート脱却しろシコ郎」

「チョロ松だって!! つーか、もはや誰?! 僕の存在がなくなっただけどー!」

チョロ松の非難を軽く流し、耳を小指でほじくる銀時の顔はめんど

くさいの文字がありありと浮かぶほど、どーでもよさ気な雰囲気のことだ。

「まともに相手するだけ無駄と判断されているのだろう。」

「いやいや、ダメなんだって!! あんな調子じゃ今後どう接していいのか分かんないって!! それになんか最初の頃自分は誰だとか、妹云々言っちゃってるし! 妄想と現実が曖昧になって、もう病気だよアレは!!」

「どーせギャルゲーの主人公的なキャラ作りだろ。妹萌えタイプに行こう的な。」

「お前だつてやりそうだし、つーかやるんだろ?」

「やらねーよ! イタ過ぎるわツ!!」

「もやは聞くつもりはないのか。」

銀時はギャーギャー喚くチョロ松を置き去りに店から出ると停車しておいた愛用の銀の字印のスクーターに乗り、切らしていたイチゴ牛乳を買う為にエンジンを鳴らし走らせた。

「つたく、チョロ松の野郎。ちつとは金になる話でも持ってこいつての」

先程のことで嫌味たらしく愚痴を零す銀時は手慣れた操作でスクーターを運転し、目的のスーパーに向かっていく。

ある程度走らせて、目的地が見えたその時、見に覚えのある人物の姿がスーパーのある側の歩道をゆっくりとした普通のペースで歩いているのを目撃した。

「アレは…おそ松か」

チョロ松の相談の話題に上がっていた件の人、松野家の長男松野おそ松だった。

チョロ松と全く同じ顔と髪型。しかし着ているパーカーはチョロ松が緑だったのと違い、おそ松は赤。しかしパーカーそのものと服の中央にある柄が松野マークである事に関しては完全に共通している。

丁度、銀時と同じスーパーに入るらしく自動ドアを潜って店内に入っていくおそ松。それを見届けた後でスクーターを適当に空いている場所に置き、同じように自動ドアを潜っていく銀時はすぐにおそ

松を見つけることができた。

「よお、おそ松」

気軽に声をかける銀時だが、返ってきた答えは……。

「え？ あ、銀さん……で会ってますよね？」

「……………」

いやに敬語のそれだった。

断っておくが、おそ松という男が知り合いに対し敬語を使うような男ではない。そもそもデリカシーすらない。そんな男が敬語交じりに見ず知らずの他人とでも接するような雰囲気です。接するなどありえないのだ。

「あ、あの？」

「え、あ、あーそうだよ？ 万事屋の坂田銀時こと銀さんだけど？」

「つか、本当に変だよなお前。チョロ松が言ってたけど」

「え？ チョロ松がですか？」

「あー、なんかお前の様子がおかしいってんでどーにかしてほしいって来たんだよ俺ん所に。まあ確かに変ちゃ変だけどよ、前に比べたらなんかイイ感じでいいんじゃない？」

さも適当に言う鼻の穴を人差し指でほじくりながら言う銀時。

「そ、そうですか？」

「そーそー。知り合いのおでん屋で金を払わずツケを溜めまくったり、四六時中エロい事や競馬とかパチンコに耽って働きもせず、親のスネを齧るしかない寄生虫的存在。それがお前たち松野家の六つ子だろーが」

「そ、そこまでなんですか？」

銀時の言葉におそ松は引きつった苦笑を浮かべる。

「まっ、何があったのかは知らないけどよ。お前もこれで立派な社会人だな」

「は、はあ……」

「じゃ、せいぜい頑張れよ」

とにかく問題はない。

確かに以前と比べて変わってはいるが、それだけだ。あの雰囲気か







えー……ツツツツツ!!」

この異常過ぎると言っても当然と答えられる状況の中で、銀時はとりあえず叫んだ。

喉潰れるんじゃないやね? って位に叫んだ。

「ど、どどーすんだよコレエッ!! なんで女になってんだよ?! え、なに、銀さん今度は別人レベルでまた女化しちゃったの?!」

パニックになっていているせいか、色々メタい事を平然と吐き出している銀時。過去に一度女性へ性転換したことがあったが、その時は普通に街中を歩いてた際デコボッコ神教の特殊兵器によるレーザー光線の照射により強制的になってしまったのだ。

無論、自分の意思でそうなったわけではないし、今回も自らの意思でこうなった覚えなど毛頭ない。以前と状況は異なり、突然気を失い目を覚ましたら少女になっていたと言う、ちよつとした『君の名は』状態なのだ。

「ま、マジでやべえぞコレ。っーか、これ、女化っつーより……ひよつとして入れ替わり系な感じなのか?アレか? 『君の名は』的な感じで彗星をどうにかしなきゃならねえのか?」

冷や汗を滝の如く流し、狼狽を顔に張り付かせる銀時。

何とかしようと混乱に陥った頭で元より出来の悪いI・Q値を高回転させ、この状況を打破する術を捻り出そうとするが皆無に終わった。

無理もない。

銀時のやろうとしている行為はとてつもなく広く真つ暗闇の中で当てもなく、ほぼ手探りの状態で目的の物を見つけ出す。そんな無謀同然のもの。無事成功へ至る可能性は天文学的数字になるだろう。

「と、とにかくだ。まずは誰かに聞かねえと……」

よつて銀時は、一先ず誰かを探すことにした。

この建物に詳しい関係者なら今自分がいる場所について分かるかもしれない。あくまで可能性の話だが、しないよりはいいし合理的と言える。

「あれ、こんなとこで何やってんのなぎゃ」

立ち上がったって誰か探そうとした時、ふと声がかかった。振り向くと自分と同じ制服を着た少女らが2人いた。

「ああ、丁度良かった。ここどこか教えてくれねえか？」

「え？ どこってペローネ学院だよ。何言ってるのなぎさ？」

ペローネ学院。場所が場所なら名前も聞いたことがない単語だった。

「っていうか……なぎさ、そんな口調だっけ？」

「まあ、アレだ。イメチェンだよイメチェン」

「それになんか目が死んだ魚みたい……」

「これもイメチェンだから気にすんな。いざって時はもうバリバリに煌めくから」

「そんなイメチェンいる？」

死んだ魚のような目のイメチェンという、訳の分からない返答に苦笑を浮かべる少女ら。対し銀時はいちいち、ごまかすのが面倒とでも言いたげな顔で人差し指で鼻をほじくる。はつきり言って美少女でそれをやるのはどうかと思うが、それを気にしないのがこの男だ。

「こんな所にいたか」

後方から声が聞こえた。

明らかに少女のそれに振り返った銀時の目に入ったのは、1人の少女だった。同じ制服を着ている所見ると彼女もこのペローネ学院の女子生徒らしい。容姿はボーイッシュな雰囲気的美少女な銀時のそれとは違い、何処かの令嬢のような気品を纏っている。

そんな別ベクトルの美少女だった。

「あ、ほのかさん」

「ほのかさんじゃない……桂だあッ!!」

「おめえええかよー……ッッッッッッッ!!」

恒例とも言える台詞のおかげで一秒足らずで少女の正体を見抜いた銀時の行動は実に迅速で、的確に彼女の顔面めがけドロップキックを炸裂させた。

バカが集まると大抵碌なことがない。

「で、なに？　なんで俺みたいな状況になっただよツラあ」

「ツラじゃない桂だ。ともあれ、この異界の地にて友と再会できたのは嬉しい限りだ」

「俺はマジで死ぬかもってぐれーに最悪だけどな、このヤロー」

一方は嬉々と。もう一方は忌々しげに。

そんな場面を作り出しているのは、このベローネ学院一のスポーツ美少女として女子からも絶大な人気を誇る「美墨なぎさ」。

窓際の令嬢という言葉が相応しいほどにお淑やかで頭脳明晰。なぎさと互角の人気を持つ「深雪ほのか」。

この二人は大変仲が良く、親友と言ってもいい程なのだが、何故かそんな空気とは程遠い雰囲気か二人の周囲を形成していた。

別に仲が悪くなったとか、変な感じになったと言うわけではない。実はこの二人の中身は魂的な意味で別人の存在が彼女らの肉体に憑依した状態となっているのだ。

なぎさの方には、銀時が。

ほのかの方には、桂が。

同じ境遇の者が同じ場所で出会うという奇跡のような再会の出だしから、ほのかになった桂の顔面へ盛大にドロップキックを見舞った銀時はすぐさま桂を搔っ攫い、人の気のない校舎裏側へと連れ込んだというわけだ。

とにかく互いに意見を述べるが全く噛み合っていないのは気にしてはいけない。いつもこうだからだ。

「つーかよ、お前こゝが何処だが分かんのか？　少なくともベローネ学院なんて場所聞いた事ねーぞ」

単に知らなかったと言うことは否定できないし、学び舎に興味を持

つような理由も性癖もないからこそ知らなかった可能性は十分有り得るのだが、しかし桂はその可能性を否定した。

「銀時。お前が知らなかったのも仕方のない話だ。それにここは探そうとして探せる場所ではない」

「なに？　なんかの秘密基地かここ？　学院てのは嘘で実は防衛軍か悪の秘密結社の基地なんてオチじゃねーだろうな？」

「異世界なのだ、ここは」

「……へ？」

間抜けな声を漏らす銀時に桂は特に気にも留めず、話を続ける。

「銀時。信じられないのは無理もない話とは思うが、俺たちは原作やアニメの方で猫になったり、またはお爺さんになった身だ。時空を超えて異世界へ魂のみで転移し、このような少女らの肉体に憑依するなど有り得る…」

「ワケあるかあああああー………ツツツツツ！！！！」

「ぐぼおわツツ！！」

話を遮えるように叫んだかと思えば、銀時は桂の両頬を片手で掴み、タコの口のようにして血走る目つきで迫る。

「なんでタイムスリップじゃなくてワールドスリップしてんだあああああツツツ！！　しかも魂だけで?!　ふっぎけんなああああー………ツツツツツ！！！！」

「お、おじづげ、ぎんぼぎ。ばばぜば……」

「どう話したって分かんねーよ!!　何コレ？」

ソウルソサエティに行つて魂元の身体に戻してもらうかしかねーの？　助けて○護おおー………！！！！」

混乱ここに極まれり。そんな言葉が的確な程に銀時の心は困惑と動揺、そして明日への光が見えない真っ暗闇な現状に対する不安が嵐の如く荒ぶっていた。

それはもう、某卍解死神漫画の主人公に堪らず助けを呼ぶ程に…。

「ぶはっ、ええい見苦しいぞ銀時！　それでも侍か貴様は!!」

「侍らしいとこ原作やアニメで碌にしてねー奴が言うなボケ!!」

何とか手を振り解き文句を言うも、銀時はそれを正論の一刀の下に



「ぐはああツツ!!」 な、何をやる銀時……俺はただ便秘という悪夢のような敵と戦っていただけ……」

「そんなので一々シリアス風の雰囲気醸し出してじゃねーよ!! もうめんどくせえからさ、黙ってくんね? お願いだよ三百円あげるからさ」

!!」

「話を聞け! 肝心なのはこの後だ」

少し鼻血を出しながら、必死に言う桂。とりあえずは聞いておくとして。もしかた何か下らない事を言おうものなら誰の体であろうが構わず、もう一発決めてやる腹積もりの銀時は顎をクイツと前へ出すジエスチャーで続きを催促した。

「では話の続きだ。便秘と激戦を繰り返す中、突然周りが黒一色に染まった何も無い空間と化した」

何も無い真っ黒な空間。不思議と妙な近親感を覚えた銀時だが、構わず桂は話を続ける。

「そこで俺は『あの仙人』に会った」

「仙人って……まさか『あいつ』のことか?」

銀時の中で1つの候補……と言うか、それしかない人物の記憶が蘇る。

仙人。正確には洞爺湖の仙人と言っているのか。

銀時の持つ木刀『洞爺湖』に宿った化身的な、あるいは精霊的なものか。とにかく一言で表すと『よく分からない存在』と答えるしかない50代くらいのグラスンをかけたおっさんである。仙人というのも勝手に銀時がそれっぽいやうに感じで言ったに過ぎないが、正式にそうなのか疑問が生じるのだが。

「うむ。洞爺湖の仙人殿だ」

「まくたアイツかよ。原作とアニメで二回、小説版銀八先生で一回、合わせて三回しか登場しねないモブ野郎じゃねーか。そんなヤツがこんな二次創作に出てまで何しに来たんだよ」

「そう言うな銀時。仙人殿は大事なことを伝えに俺の下へと参じたのだ」



「なんで便所で用足してるタイミングで来るんだよ。もつといいタイミングがあるだろーが」

銀時が正論を言うものの、桂はそれを気にも止めず話を進めた。

『突然すまないな。我が主の戦友、桂小太郎よ』

『き、貴殿は洞爺湖の仙人殿!! よもやこんな二次創作にまで出て来るとは……いったいどうしたのだ?』

恒例のメタい台詞を普通にスルーし、仙人は桂をこの異空間と呼ぶに相応しい場所へ導いた理由を口にする。

『単刀直入に言うが、汝には我が主の銀時と共に異なる世界を救ってほしいのだ!!』

カツと目を見開き、至極真剣な面持ちで語る仙人。それに桂は戸惑いの声を漏らす。

『こ、異なる世界とは?』

『無理もないことかもしれんが、今は急を要する。詳しいことはいずれ、後ほど話す時が来る。強制的で申し訳ないがこれも世界間における均衡の為だ』

突然のカミングアウトに桂はただ驚くしかなかった。さしもの桂も異空間へ連れて来られて、突然こんな事を言う白髭白髪老人には絶句しかない…

『そ、それはもしや……デイ○○ーラ○○ドの事なのかツツツ!!』

なんてことはなかった。

『え?』

『そうか。とうとう俺もかの鍵の聖剣を手に取り、様々なデイ○○ー世界を救う日が今! ここに来たというわけかツツ!!』

『いや、あの、違うよ? なったらマジヤバいからソレ。あっちの偉い人たちが黙ってないからね?』

『ならばお供はド○○○○にグー○○○○で決まりだな!! 仙人殿! 早くキー○○○○を!』

『ちよ、話を聞いて!! 本当にシヤレになんないから!!』

「とまあ、こんな会話があつて仙人殿から世界を救ってほしいと言う願いを了承したわけだ。

しかし、なんでも俺たちは本来この世界にはいない存在。そのままの状態だと世界の抑止力的なアレによって存在が消えてしまうらしい。そこで、俺たちの魂のみをこの世界の存在である少女らの肉体に移し、作用を起こさないようにしたというわけなのだ」

「回想の必要性がないんだけどオオ!! これただお前がキー○○○使いたいだけの話じゃねーかよ!!」

全くもって銀時の指摘は正論だった。しかし桂に反省などという字は存在しない。

「そうだとも。故に惜しい。キー○○○が手に入ればミツ○○と共に戦場を駆け抜けられると思ったのだが……」

「こんな作品がデイ○○○とまともにコラボできるわけねーだろ!!俺たちの心臓握り潰されるわボケがツツ!!」

魂のシャウトと言わんばかりに叫ぶ銀時は叫んだが、確かに色々と心臓を握り潰されかねない位にヤバイのは事実。

というか、もうこの時点でアウトなのかもしれない。

「それとだな。どうにも俺たちだけでは忍びないということで、何人か助っ人を同じように魂のみでこの世界へ転移させたらしい。無論同郷の者だ」

「あ? 俺らみたいなのが他にもいるのかよ。めんどくせえーな」

言葉通り、顔にも面倒さを滲ませる銀時。

色々と予測不能な事が起き過ぎているせいか、かなり苛立っているようでそれを隠そうともせず、銀時はめんどくさいと不満を呈する。

「そう言うな。何分この世界は全くの未知なる地なのだぞ。人数は多いに越したことはない」

「つーか、その助っ人って役に立つの? そもそも知ってるヤツなのか?」

「案ずるな。既に接触には成功している。故に言わせてもらおうが相手は知己の人物であるし、信頼もできる武士たちさ」

不敵に笑う桂だが、銀時には分かる。

こういう場合、桂という男が自信満々と答える時は必ず最悪な事態が起きるか、あるいは碌でもない事が起きるかのどちらかだと。

※

放課後。

既に日は夕暮れへと差し掛かり、用のない者は帰路へ、部活に励み時間を費やす者は精一杯努力して青春の汗を流している。

そんな時間帯に銀時と桂は、ある場所を訪れていた。

「すまない。みんな待たせたな」

訪れた場所は今は使われていない廃墟の建物。その駐車場には計6人の少女達が屯していた。正確に言えば、桂が来るまで待っていた、と言うのが正しい。

「本当だよヅラ〜！ 俺ら待ってたんだから」

「フツ、まさか銀時までこの世界へ誘われようとは……まさにFat e！」

「うっさい黙れクソ松」

「にしても有り得くない？ 僕等がこんな可愛い女の子になるなんて」

「そうだよね〜嬉しいと言えば嬉しいけど、

なるってのはね〜」

「ハッスルハッスル〜!!」

一人目は一見すると少年と見間違う程に一国の王子様の如き魅力を出しつつも胡座をかいている赤髪の少女。

二人目は青く長い髪を特に結わずにそのままストレートにした髪型で何処か委員長的空気があるのだが、かなりイタい台詞のせいで台無しになってしまっている。

三人目は青髪の少女と同じくストレートな髪型だがこちらは紫色をしており、その目つきを鋭くさせ、まるで獲物を狙う猫と言わんばかりの凶悪さで睨みを効かせる。

四人目は緑色の髪をボブカットにした少女で今の現状に対してど

うやら不満を抱いているようだ。

五人目はそれに同意したピンクの髪をチョココロネのような団子状に纏めた少女。やはり緑の少女と同じく不満の溜息を漏らしていた。

六人目は最初の赤髪の少女と同じくボーイッシュな茶髪の少女。両腕でガッツポーズし、元気滂刺さをアピールしているかのようだ。皆何とも言えない個性の強い面々だが、銀時には1つの納得感があつた。

確かに彼女らの顔は今日初めて見る顔だ。

だが、言動や仕草は銀時が認知する知り合いの中でベスト・オブ・クズと称されかねない程ニートでしょうもない六つ子の兄弟の、まさにそれだった。

「こ　　の　　ク　　ソ　　松

がアアアアアーーーーーッッッッッッッッッッッッッッッッッッ!!!」

「べぶらああッッ!!!」

的確なキックが赤髪の少女：正確にはその顔面を捉えて、見事に命中した。

「痛っつてーよ!! バカじゃねーの! マジでバカじゃねーのオイ!!」

「バカのなのはテメーだゴルアツ! なんで、なんでお前ら?! もつといい人材いたよね? テメー等クズ・ニート・バカの三拍子揃ったアホ共でどうしろっつーんだよ?!」

「オーオー、落ち着けFriend」

怒鳴り散らす銀時を見かねてか青髪の少女：正確には、中身だけ松野家次男のカラ松が説得を始めた。

「いいか、こんな状況でpanic且つshockになるのは分かる。大いに分かるとも。だがここはcoolになることが大切なんだ。氷の如き：いや、まさしく冬の季節のようなcool goodな思考じゃなきゃ、Best ideaは生まれない。

そう、誰しも人は不完全。No perfectなんだ。けどそれでも俺たちは逆境の中を進まなくちゃいけない。いけないだ……



テラフォーオー的蚊の怪人：近藤勲。

白いG的なアレ：猿飛あやめ。

銀時の世界において「ストーリーカー」の異名を無意味に背負った二人だった。